

大学院美術研究科は、美術・デザイン理論研究や作品制作を通して、新たな価値観を創出し、社会に貢献しうる研究者・表現者の養成をめざします。

グローバルな視点に立ち、芸術に関する学識や技術を自立して探求し、自らリーダーシップを持ち高度な専門家として社会に貢献したいという高い意欲のある人材を支援して参ります。

今、社会は大きな変革の時期にあります。情報化、高速通信ネットワーク、そしてAI技術革新が急速に進み、作業の効率化は進む一方で、新しい発想や、美を生み出す創造性、そして心の問題は、AIでは解決できません。

さらに新型コロナ感染拡大によって、健康や経済活動のみならず精神面でも、大変厳しい状況となっています。人と人の密接なコミュニケーションが制限され、これまで当たり前とされていた日常が立ち行かなくなっています。新しい社会のあり方、新しい日常、そして心の安心をどのように生み出していくか、考えていくことが大切です。

人々の心のつながりを深め生活を豊かにする美術・デザインの果たすべき役割は、これまで以上に必要とされます。多様で可能性に満ちた研究や表現を通して、社会的意義のある理論・表現を構築し、独創性・新規性のある研究や作品制作をめざす人を求めます。

大学院美術研究科長
川口吾妻

Contents

- 1 大学院美術研究科長からのメッセージ
- 2 建学の精神
教育理念
教育目標
- 3 アドミッションポリシー
教育組織
- 4 博士後期課程
- 8 博士前期課程
- 10 博士前期課程 美術専攻
- 13 博士前期課程 デザイン専攻
- 17 博士前期課程 芸術文化専攻
- 20 開設授業科目
- 21 学費
- 22 各種制度

※掲載されている教員名は2021年度の担当です。
2022年度は変更になる場合があります。
(五十音順掲載)

建学の精神

「女子美」の名で知られる本学園は、女性に対して高等教育機関における美術教育への門戸が開かれていなかった明治33(1900)年に、「芸術による女性の自立」、「女性の社会的地位の向上」、「専門の技術家・美術教師の養成」を目指して、美術教育を行う学校として創立しました。以後、今日まで120有余年にわたる長い歴史の間に、画壇・デザイン界をはじめ、教育界などあらゆる分野に優れた人材を輩出するとともに、社会で自立できる女性たちを送り出してきました。現代においても、知性と感性と技能を併せもち、美術の専門を生かして社会的、経済的に自立できる人材の育成を、下記の教育理念のもとおこなっています。

教育理念

博士後期課程

1. 作品制作と理論との融合による新たな制作者・教育者の養成
2. 社会において直ちに指導的役割を果たし得る高度な専門知識・技術をもつ人材の養成
3. 幅広くかつ堅実な方法論をもつ造形理論研究者の養成

博士前期課程

1. 美術の新しい動向に対応し得る、確かな原理を体得した専門家・作家・研究者の養成
2. 芸術研究の新分野の開拓
3. 新しい視点からの創作研究

教育目標

博士後期課程

美術理論に基づく最先端の専門知識・技術を身に付け、新たな価値の創造によってこれからの社会に貢献する指導者、専門家を育成する。

博士前期課程

美術専攻	デザイン専攻	芸術文化専攻
芸術における高度な専門的知識・技術・表現力を理解・修得し、さらに多様化するメディアやテーマも視野に入れ、現代の美術において独自の創作と研究の方法論を確立する。新しい表現力で社会活動・創作活動を主体的かつ論理的に行うことのできる人材の育成を目標とする。	多岐にわたるデザイン分野において、各研究領域とも、デザイン本来の意味を充分理解し、自己能力・意識の向上を努めると共に、広い視野でデザインを捉えられるように、自ら、研究・探求・創造をおこない、感性とクリエイティブな発想、独創的な表現力の向上、時代の変化に柔軟に対応できる深い知識やコミュニケーション能力を兼ね備え国際社会においても活躍出来る人材の育成を目標とする。	美術における高度で広範囲の専門知識・技術を身に付け、社会の各領域において広く活躍出来る専門的技術・知識を修得した専門家を育成する。

アドミッションポリシー

博士後期課程

独創性と社会的意義のある新たな理論・表現を構築し、研究成果を社会に還元することを目指す人、国際的な視点に立ち、芸術に関する学識や技術を自立して探求する高度な専門家として社会に貢献し続けたいという高い意欲のある人材を求めます。
求める資質・能力としては、「幅広い視野と芸術的発想力を持つ人」「問題意識を持ち、課題に対して柔軟に積極的に取り組む人」「豊かな表現力を持つとともに知識への深い探究心を備える人」が挙げられます。

博士前期課程

芸術に対する深く幅広い学識と技術を持ち、高度な専門家としてそれぞれの分野で活躍することを目指す人、社会に貢献する作家・研究者・教育者として自立したいという意欲ある人材を求めます。
求める資質・能力としては、「芸術をはじめ、広く、人文、社会、自然科学に関する知識を持つ人」「主体的、計画的に取り組む姿勢、生涯を通じて学び、創作や研究に取り組む素養がある人」「的確な情報収集や分析、論理的思考ができる人」「芸術分野において必要とされる技術、表現力、並びに自らの創作や考えを伝えるコミュニケーション・スキルやプレゼンテーション能力を身に付けている人」が挙げられます。

教育組織

博士後期課程

専攻	研究領域
美術 (入学定員3名)	美術 (相模原キャンパス)
	デザイン (相模原/杉並キャンパス)
	芸術文化 (相模原キャンパス)

博士前期課程

専攻	研究領域
美術 (入学定員35名)	洋画、日本画、版画、工芸、立体芸術 (相模原キャンパス)
	メディア、ヒーリング、ファッションテキスタイル、アートプロデュース (杉並キャンパス)
デザイン (入学定員15名)	ヴィジュアルデザイン、プロダクトデザイン、環境デザイン (相模原キャンパス)
芸術文化 (入学定員7名)	色彩学、美術史、芸術表象、美術教育 (相模原キャンパス)

博士後期課程美術専攻

Doctoral Degree Program

カリキュラムポリシー

博士後期課程は「作品制作と理論との融合による新たな制作者・教育者」「社会において直ちに指導的役割を果たし得る高度な専門知識・技術を持つ人材」「幅広くかつ堅実な造形理論研究者」を養成することを目的としてカリキュラムを編成する。

- ・円滑な研究活動を行うため、「造形研究計画演習」において、学生の研究計画の立案に取組み、主任指導教員と理論系教員が 関わり指導を行う。「造形理論特別研究」にて、理論研究の方法論を会得するとともに、「特殊研究」により深く体系的な研究に取り組む。
- ・研究の集大成として、博士論文と修了制作（実技系分野のみ）に取り組む。研究を通して、自立して研究活動を継続展開できる能力を身につける。

美術研究領域

専門的な作品制作と理論を統合した研究を行う。それに伴い、指導的役割を果たし得る情熱を持った制作者・教育者の養成のために洋画・日本画・版画・工芸・立体芸術の研究分野での研究指導を行う。

ディプロマポリシー

研究テーマと内容に独創性と社会的意義があり、新たな理論・表現を構築したか。
研究成果を国内外のコンクールや個展、学会等を通して社会に還元し、高い評価を得たか。

デザイン研究領域

デザインに対する幅広い視点とより高い専門性を探求しそれらを養う為に、学位を保持する複数分野の教員による指導を行う。学生が既存のデザインの研究を踏まえ新しい知見の発見や理論構築を積極的に取り組む指導を行う。

「人と人のコミュニケーション」「人とモノのインタラクティブ」「人と空間のインタリレーション」などのデザイン分野の専門性と相関性を考慮し、系統だった研究指導を行う。

芸術文化研究領域

従来 の 堅 実 な 研 究 方 法 論 を 基 礎 と し な が ら、 様 々 な 周 辺 領 域 の 研 究 と の コ ラ ボ レ ー シ ョ ン が 可 能 な 柔 軟 な 思 考 力 を 備 え た 研 究 者 の 養 成 を 目 指 す。

基礎から応用まで幅広い視点を持ち、高度に専門的な研究の行える人材の育成を目指す。

長年の研究を継承するとともに新たな研究の視点・方法を採用入れ、厳密な研究姿勢とともに新しい研究の多様性にも対応する指導を行う。

Fine Arts

美術研究領域

これまで美術教育においては、理論と制作、二極的な構造で進められてきました。しかし、「新たな価値の創造」が求められている今日、創造の原理に両者の違いはなく、相互に補いながらその刺激を共有することこそが必要だと考えられ、制作体験を積んだ上ででの理論研究が重要になってきます。また、美術における伝統的なジャンルの境界がなくなりつつある状況の下では、理論的・体系的な「哲学」をもつ制作が期待されます。こうした背景のもとに、本研究領域では新たな造形表現のあり方を追究し、理論と制作の双方から、より実践的な作家の養成を目標にした指導を行います。

洋画では、芸術の本質的問題としての描く喜び、創る楽しさを根源的精神行為ととらえて、現代世界に向き合おうとしています。日本画では、伝統を含蓄した新しい日本画を目指す中で、真の個性を磨き、創造の本質に迫ります。版画では、版表現とそれに関わる技術を軸として研究し、各自の主体性に基づき現代の版画独自の専門性を追求します。工芸では、創作研究をさらに明確化し、我々を取り囲む工芸の多様性と可能性について比較検証し工芸造形の本質を見極めるための制作活動を確立します。立体芸術では、各素材に対する研究を深め、新しい表現への果敢な挑戦を試み、立体芸術の可能性を探ります。

いずれにおいても、博士前期課程での結実を基にしてさらなる深化を計り、美術界に新しい価値の発信ができる作家を育成指導するという視点は同一です。

専任教員

大森 悟 おおもりさとる
博士論文「写実的身体」など、身体性、映像性を複合的な表現方法で実践、研究している。知覚すること、記憶することからの問題意識と思考を展開するためにモチーフ観察などの取材活動を重視し、さらにそこから同時代性を内包した表現と己の存在を認識した表現についての考察と探究をする。また、実験的なフィールドワーク、ワークショップなどから、社会と環境などの相関関係を調査する。

岸野 香 きしのかおり
古典作品の模写、修復研究を通して、様々な専門的技法、素材の研究をすすめている。あわせて日本画制作研究を軸とし、日本画の多様な可能性を追求している。それぞれの研究テーマに基づき、伝統に根ざした新しい日本画表現を目的に研究指導を行い、創造の普遍性を追求し、実践的作家、研究者、美術教育者の養成をめざす。

清水美三子 しずみさこ
リトグラフ・木版画の創作研究を軸とし、版画の多様な可能性の追求も研究対象とする。それぞれの研究テーマに基づき、版表現の理論構築及び新たな視点からの版表現の分析や解釈を実践し理論の最新を行うことを目的として研究指導を行う。哲学・思想を基にした美学的な考察と技術の調和をもって探求していく。

平戸貫児 ひらこうじ
創造、表現、研究能力を養い、更には自立して創作、研究活動を行うのに必要な能力を備えた彫刻家の養成を目指す。現代の彫刻および現代美術の研究指導に併せ、これまでに修得した表現力や技術を基に、より専門的な彫刻の創作指導を行う。

富士册子 ふくしともこ
博士論文「境域をうつす絵画《絵画—マンガ》往還による多視点・意識・身体 の 考 察」では、絵画とマンガの構造的な相違点を検証し、マンガの仕組みや文法を絵画に取り入れることが可能かを考察、作品においても実践、研究を行っている。歴史的、社会的な視点による理論構築と、現代における表現について、その思考法と手法、技術の研究指導を行う。

宮高弘道 みやまひろみち
日本画材料を量と質から捉え直し、独自の視点で新たな日本画表現を探索している。特に紙漉工房を中心に展開する基底剤としての和紙の開発研究と、墨描線による空間表現についての制作研究を基本として、創造性と技術力を併せ持つ作家の育成を目指す。

村岡貴美男 むらおかきみお
独自の表現のための素材、材料の可能性を探る。作品コンセプトに根ざした表現技法を追求して行きながらも、「描く」という事に重きを置きたい。それぞれが、作品の着想面に於いても制作段階に於いても論理的な思考、組み立てができるよう指導を行う。

デザイン研究領域

デザインは古今東西のあらゆる時代、社会との関わりの中で形成されています。それゆえ現代社会のニーズに対応した創造的作品制作と理論研究との融合による高度な論理的背景を持ったデザイナー、クリエイター、研究者、教育者などの指導的な立場となる人材育成を目指します。

本研究領域は、インターフェイスの視覚造形、インタラクティブ、インタリレイションの環境造形、インナーマインドのヒーリング造形の3研究領域に分かれていますが、それぞれの研究領域において実践的デザイン、創作活動を通じて最先端の分野から基礎的分野に至る様々な分野における新しい理論と方法論の構築を試み、論文作成に結びつけます。

プロセスとしては以下の項目を最短3年の課程で計画し、指導を行います。

1. 研究テーマ設定
2. 既往研究(既存の関連するデザイン作品、研究論文など)
3. 仮説構築
4. 作品創作
5. 理論、方法論の検証(データ収集)
6. 新理論、方法論の構築と実証
7. 論文作成(査読付学術発表)
8. 論文審査
9. 論文公表

研究方法は、専門領域の複数の教員が、各学生の特性に対応し、密度の高いコミュニケーションをとりつつ適切に指導します。

専任教員

川口吾妻 かわぐちあづま
急速に進化するICTを活用したコミュニケーションデザインの研究を中心に、グラフィック、写真・映像、空間演出、アプリ開発、インタラクティブの表現と、社会の様々な課題の問題解決につながる芸術の応用について、制作と研究の両面から指導を行う。特に医療とメディア芸術表現、障害児者の支援と理解、社会的弱者と防災、インクルーシブと生涯学習への芸術の応用について研究を進めている。

山野雅之 やまのまさゆき
アートとデザインの領域からヒーリングについて考え、個々の研究テーマの中で制作と理論研究を構築していくことで、その社会的意味と必要性を探求する。また、ヒーリング表現の可能性を考えていくことにより、実践的で社会性のある発見を目指すと同時に、その裏づけとなるための調査と検証、データ分析などから理論的な研究を進め、社会的な活用方法についても探っていく。

横山勝樹 よこやまかつき
環境心理学やデザイン方法論の研究を扱う。「都市空間の認知とデザイン」「高齢者・障害者・子どもなどに配慮したユニバーサル・デザイン」「展示空間の知覚と認知」などの特定分野の研究、もしくはそれ以外に各自が設定するテーマを深く追究する。研究成果は、具体的なデザインの提案もしくは社会的活動の成果に基づく動機づけと、論文による理論構築を通してまとめられることを目標とする。

芸術文化研究領域

本研究領域は、いずれも超域的研究を志向しており、堅実な方法論を基礎としながら、様々な領域とのコラボレーションが可能となるような柔軟な思考力を備えた研究者の養成を目指します。色彩学は造形研究の主要な一部門ですが、物理学・化学・生理学・心理学・美学等からアプローチすることができる研究分野であると同時に、色彩研究の成果は製品の開発や環境の設計などにも不可欠な技術として発達してきました。したがって、幅広い視野と基礎的な知識を前提にして、高度に専門的な研究が行われます。指導内容としては、表色・調色など物理的立場からの研究、色彩感情・色知覚・色カテゴリーなど心理学的立場からの研究、色彩概念・色彩発達史など文化論的立場からの研究、色彩計画などデザイン理論的立場からの研究があります。

美術史では、東西にわたる美術史学の長年の研究成果を継承するとともに、近年進展しつつある新たな研究の視点・方法を探り入れた指導を行います。したがって、一方では記録・文献類の正確な読解・批判、作品の実証的な考察によって厳密な研究姿勢を養います。また他方では、社会史・思想史・文芸批評等隣接領域の方法論や成果を積極的に取り上げ、幅広い視野と認識から美術史に対する研究の多様な可能性を探っていきます。さらに、自然科学的調査の結果を有効に活用できる人材の養成をも目指します。

芸術表象では、関係性の美学など先端的な芸術理論を基軸としながら、記憶による歴史概念の再考、ポスト・コロニアル思想と世界の多様性、共同体理論、クワイ・スタディーズ、ケア理論などを積極的に取り入れ、批評精神を磨き、柔軟な芸術理解の在り方を探究します。また、座学に縛られることなく、状況に応じて実験的なプロジェクト、実践、表現、討議に取り組むことを心がけ、理論と実践の両面に秀でた人材の輩出を目指します。

美術教育では、美術を教育することの意義、あるいは効果的な教授法などについて、科学的、実証的な立場から研究します。すなわち、これまで学校現場を中心に長く蓄積されてきた美術教育に関する知見や研究成果について学ぶとともに、認知科学や脳科学など、近年発展している隣接諸科学の方法論や研究成果を積極的に取り入れ、幅広い視野から新しい美術教育学の確立を探究する中で、研究者として自立できる独創的な人材を養成します。

専任教員

稲木吉一 いなぎよしかず
美術史を視覚的コミュニケーションの領域から捉え直すとする近年の研究動向を踏まえ、日本の古代中世美術を中心に、新たな問題設定とその解明に向けた研究指導を行う。また、各地の文化財調査を通して作品の扱ひ方と文化財への認識・経験を深める。

坂田勝亮 さかたかつき
色彩を中心とした視覚全般における現象生起の過程について考えていく。色彩は光によって生じる人間の感覚である。これは眼から脳に至る人間の視覚情報処理過程によって実現している。そして同じ脳内に生じる他の心理過程に様々な影響をもたらす。ここではこの色知覚の過程を主として、錯視、順応、認知、表現技法などを中心とした視覚効果全般について教育研究を行う。

杉田敦 すぎたあつし
芸術という、なによりも自由であるはずの場を利用して、新しい知、新しい表現の在り方を真摯に求めていきたい。理系と文系という枠組みはもちろん、理論と実践、制作と研究など、種々の制約にとらわれることなく、人間と社会、芸術の関係をしなやかな姿勢で見つめていく。著書に「ナノ・ソート」、「リヒター、グールド、バルンハルト」、「Interviews」、「静穂の書」など。

榎山満照 ならやまみつてる
中国を中心とする東アジア古代美術史をフィールドして、かたごのない想いや願いはどのように目に見えるかたちとして表現されてきたのか、図像学の手法を用いてそれを考察し、作品からアジアの先人の想いを読み取っていく。また、東アジアの美術工芸というローカルな文化遺産が巻き起こしたグローバルな展開を知り、異文化の接触と交流の場における美術工芸の作用を文化的な関心から分析する。

前田基成 まえだもとり
これまでの美術教育に欠けていたevidence(エビデンス)に基づく実証的な立場からの研究を志向している。最近、目覚ましい発展を示す認知科学、脳科学の知見を取り入れて、子どもたちに美術を教育することによってどのような効果があるのか、また効果的な美術の教授法はいかにあるべきなのかについて教育研究を行っていく。

三谷理華 みたりにか
福岡市美術館、静岡県立美術館に学芸員として勤務。フランス近代美術史を最初の手がかりとして、フランスと日本、ヨーロッパと日本の文化交流へと関心を広げている。フランス現地でのフィールド・ワークも多く経験し、作品自体の調査や印刷物になっていない一次資料の発掘にも力を入れている。主な論文に「ラファエル・コランとフォントネー＝オ＝ローズのアトリエをめぐる一考察」、「ラファエル・コランの極東美術コレクション―新出旧蔵品について」、主な担当展覧会に「ラファエル・コラン展」、「レオナルド・ダヴィンチ展」など。

博士前期課程

Master's Degree Program

カリキュラムポリシー

博士前期課程は芸術の新しい動向に対応し得る、確かな原理を体得した作家・研究者・教育者・高度な専門家を養成することを目的にカリキュラムを編成する。

- ・専攻・研究領域の枠を超えて、各研究領域の基本となる技法と分析方法、美術・デザインに関する理論に取り組むことで、学生各々の研究テーマに自由な発想と分野横断的かつ複合的視野を養う。
- ・研究課題に応じて他研究領域の特技に取り組み、新しい芸術感性と発想力、幅広い視野を培う。

美術専攻

美術の新しい動向に対応するとともに、個々の表現を追求しながら、客観的評価を加味する素材や手法の演習を通じて、実証的、分析的、系統的に創作研究するカリキュラムを編成する。
発想の幅を広げ、伝統的に固定されてきたジャンルの境界を越えた表現の創作研究を可能とする。
作品制作における十分な理論的補強を行う機会を設け、論理的思考を養成する。

ディプロマポリシー

芸術に関する深く幅広い学識と技術を有しているか。
幅広い視野と芸術的発想力を持ち、問題意識を持って課題に対して柔軟・積極的に取り組めるか。
豊かな表現力を持つとともに知識への深い探究心を備えているか。
作家、研究者、教育者、企業人等高度な専門家として社会に貢献できるか。

美術専攻

創作研究のテーマが確立しているか。
創作研究においてテーマに即した構成員、技術・素材の使用方法、表現方法を習得したか。
段階的思考がテーマに対して積み重ねられ、その思考法を習得したか。
学内・学外への作品発表に意欲的に取り組んだか。

デザイン専攻

拡大かつ多様化し続けるデザインに対して、個々の研究テーマを定め、研究テーマの裏付けとなる調査やデータ分析などの論理的な分析を行いながら、表現・手法の専門的技術の追求と作品制作に取り組み、独自の視点の創作表現を探求するカリキュラムを構築する。
豊かな発想と表現力を育む制作環境と指導体制を整え、作品制作と論理的な研究の両面から、学生の将来的発展の可能性を追求する。

芸術文化専攻

美術における伝統と創造の価値を統合する理論的な枠組みを構築し、多様な今日的視点から美術についての理論的な分析による高度で多元的な研究を行うためのカリキュラムを編成する。
色彩研究領域では、色彩学における理論と方法論と会得し、自らのテーマに沿った研究を構築することが出来るよう指導する。
美術史研究領域では、隣接領域の研究手法や成果をも柔軟に採り入れながら、美術史における理論と方法論を会得し、自らのテーマに沿った研究を構築することが出来るよう指導する。
芸術表象研究領域では、理論と実践をふまえて、芸術表象における理論と方法論を会得し、自らのテーマに沿った研究を構築することが出来るよう指導する。
美術教育研究領域では、隣接諸科学の方法論や研究成果を取り入れながら、美術教育における理論と方法を会得し、自らのテーマに沿った研究を構築することが出来るように指導する。

デザイン専攻

デザイン研究のテーマが確立されているか。
研究テーマに論理的な分析が行われ、デザイン理論の構築、実技の専門性を深めているか。
デザインの目的や対象が多様化する現代社会において、独自の視点からデザインを創作しているか。

芸術文化専攻

美術における伝統と創造の価値を統合する理論的な枠組みを構築することができたか。
多様な今日的視点から美術についての理論的な分析を行うことができたか。
色彩・美術史・芸術表象・美術教育に関する高度で多元的な研究を行うことができたか。

美術専攻

理論と技術を磨きながらオリジナリティを追求する

美術専攻は、伝統的な分野を含むファインアート系として実技制作を中心とした「洋画」「日本画」「版画」「工芸」「立体芸術」の5つの領域があります。美術における研鑽は、伝統的に個人の主体性に基づいて創作するものですが、時として職人的な制作活動の繰り返しにより、表現者としての自己確立を目指すものでもあります。

本専攻では美術の新しい動向に対応するとともに、境界を越えた表現領域の拡大、多様化に応えられるような効率的かつ整合性のあるカリキュラム編成をしています。芸術学部から一貫した専門性の追求ができると同時に、多角的なアプローチからなるジャンルを越えた視点を通した実践によって本来の専門へと集約します。

個人の手による表現に客観的評価を加味する素材や手法の演習を通じて実証的、分析的、系統的に研究する独自のシステムによって次のような成果が期待できます。

1. 発想の幅を広げ、伝統的に固定されてきたジャンルの境界を越えた創作研究が進められる。
2. 新たな表現の可能性を容易にする。
3. 作品制作における十分な理論的補強を行う機会を得て、論理的思考を養成できる。

デザイン専攻

デザインの理論と機能を追求し、社会のニーズに応える

21世紀のデザインの包括する領域はますます拡大かつ多様化しつつあります。デザイン界の様々な社会的ニーズと学生の将来的発展の可能性を求め、7研究領域を設置しています。視覚情報伝達と視覚造形表現を追究する「ヴィジュアルデザイン」。ヒトとモノ、その背景にある生活や環境から独創的な創作活動を実践する「プロダクトデザイン」。人と空間、人と自然から創造的生活環境を提案する「環境デザイン」の3研究領域は、それぞれアナログとデジタルの両方向で研究を進めます。

これらに加えて、情報とコミュニケーションをキーワードに次世代の総合的な造形表現を研究する「メディア」、混迷する現代社会の人と暮らしと癒しの関係を様々な創作活動により探究する「ヒーリング」、人間と衣服と環境の関係を身体の内／外から生じた表現方法により理論と造形の創造的創作を行う「ファッションテキスタイル」、さまざまな芸術表現の融合による社会のデザイン化に関する教育を進める「アートプロデュース」の4研究領域は、デザインとアートの双方からのアプローチをしています。これらデザイン7研究領域によってより幅広く、高度な研究、創作活動を目指します。

芸術文化専攻

継承されてきた価値と新しい価値に一貫した知の体系を築き上げる

過去から現在、そして未来へと創造を続ける美術は、人間の永遠の表象行為として多義性に満ちています。多様な表現世界が展開する今日、社会的な美術の構造分析に対する求めに応じ、芸術文化専攻は「色彩学」「美術史」「芸術表象」「美術教育」の4研究領域により、美術の色・歴史・表現・教育に関する高度で多元的な美術理論研究の構築を目指します。

「色彩学」は、色彩の心理学的側面と光学的側面の2つの立場から色彩の実相に迫ります。また「美術史」は西洋美術史、日本・東洋美術史、日本近代美術史の各分野において、作品や作家、制作状況等に関する歴史的解析を行います。「芸術表象」では、サブカルチャー・ポップカルチャーを含む現代のアートシーンを見据え、美術に近接する文芸や批評、図法等によるイメージ分析などを通して、新しい学際的美術研究のかたちを提供します。さらに「美術教育」では実技制作と理論研究の両面から高度な知識と技能を持った美術教育者の育成を目指します。

いずれの研究領域とも、制作と鑑賞の双方に立脚した美術大学にふさわしいカリキュラムを編成し、将来の研究・教育・言論等の各ジャンルで活躍が期待される人材の育成を図ります。

<p>美術専攻</p>
<p>Oil Painting</p>
<p>洋画研究領域</p>

今日ほど、真に芸術が求められている時代はありません。諸科学の進歩は人間の生活に飛躍的な便宜性をもたらしてくれましたが、その反面、紛争や環境破壊といった負の文明も引き受けてしまいました。各個人に広がる、「心の闇」の不安にも計り知れないものがあります。本研究領域では、このような現代社会の中にあって、絵を描く喜び、ものをつくる楽しさを実感することで社会に「希望」のメッセージを発信したいと考えています。絵画は精神の設計図でもありプログラムでもあります。今日を生きる精神の在り方、態度といった芸術の本質的問題を多くのメディアの総合として提示できるのが絵画です。本研究領域では国際的視野に立って、現代アートの表現はどうあるべきか、大学で身につけた技術や知識の上に、さらに多様な手法を追求し、各自のテーマを深めます。自然、文化、物質、その他関心の深いテーマを視座に置き、柔軟な発想で展開していくには材料や技法についても固定的な考えに縛られずにより創意ある表現に向けて大胆な実験を繰り返すことが不可欠です。そのような高度な訓練によって大学で体験した表現の質とスケールをさらに魅力あるものに高めていきます。本研究領域では、自由闊達なゼミと創作研究に没頭できる制作現場、研究環境を整え、世界に通用する個性とオリジナリティのある新しい表現力を持った美術作家のみならず、研究者、教育者の育成をも目指します。

専任教員

大森 悟 おおもりさとる
1994年東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒業、1999年同大学大学院美術研究科博士課程修了、美術博士。福井大学教育地域科学部生涯学習講座助教などを経て現在に至る。個展、レジデンス、展覧会企画、美術展の審査員などの活動を行っている。

白井美穂 しらいみお
1986年東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒業、1988年同大学大学院美術研究科修士課程修了。1993年アジアン・カルチュラル・カウンシルのグラントィとして渡米し2006年までニューヨークを拠点に活動。絵画、立体、映像、インスタレーション、写真、パブリックアートなど多岐にわたる作品を国内外のギャラリーや美術館、トリエンナーレ、芸術祭で発表している。

福士朋子 ふくしともこ
1990年女子美術大学芸術学部絵画科洋画専攻(油絵)卒業、2000年ペンシルヴァニア・アカデミー・オブ・ザ・ファインアーツ大学院修了、2005年東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程美術専攻油画修了、美術博士。絵画にマンガの文法や構造を取り入れた作品を発表。個展、パブリックアート制作、美術展審査員などの活動を行っている。

山内 隆 やまうちたかし
1991年東京藝術大学絵画科油画専攻卒業、1993年同大学大学院壁画専攻修了、1996年同大学油画専攻博士課程満期退学、2017年ウィーン応用美術大学で在外研修。立体、ドローイングを中心に個展、グループ展等で発表。国内外の祈りや奉拝の場を巡りフィールドワークを行う。

<p>Japanese Painting</p>
<p>日本画研究領域</p>

日本画の伝統を奥に蔵した新しい日本画を目指す中で、個々の真の個性を磨き、創造の本質に迫ります。大学で学んだ専門教育を土台に、各自の感性、表現力をさらに高度にし、日本画の独自性について考察を進め、将来にわたる創作活動の基本を確かなものとします。「日本画表現技法演習」では、古典作品を模写研究することにより、様々な専門的技法、知識を習得し、作品への洞察力を養い、創造の普遍性を追求します。また、「日本画材料・技法演習」では、優れた特質を持つ日本画の材料を科学的に見つめ、技法を実験研究し、日本画の新しい展開に繋がます。その他の理論研究とともに、自己を高め、充実した人間となるため、創作研究活動を行い、修了作品に結実させます。

専任教員

福田亜紀子 いなだあきこ
1995年女子美術大学芸術学部絵画科日本画専攻卒業、1997年女子美術大学大学院美術研究科日本画研究領域修士課程修了。人物をモチーフとした制作を中心に、個展・グループ展にて発表。現在、日展会員。

岸野 香 きしのかおり
1989年女子美術大学芸術学部絵画科日本画専攻卒業、1992年東京藝術大学大学院美術研究科保存修復技術日本画修了。東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学助手、文星芸術大学准教授などを経て、現在に至る。日本美術院同人。個展・グループ展等で作品を発表。

宮島弘道 みやじまひろみち
1992年武蔵野美術大学造形学部日本画学科卒業、1994年同大学大学院美術専攻日本画コース修了。自然物に心象を投影させ、日本画と岩絵具の新たな可能性を追求。個展・グループ展等に多数出品。現在、創画会会員。

村岡貴美男 むらおかきみお
2000年東京藝術大学院美術研究科博士後期課程日本画満期修了、2016年まで同大学日本画研究室大学助手、助教、講師。現在、日本美術院同人。院展と個展で作品発表し、個展では日本画に捉われない創作活動を行う。

<p>Printmaking</p>
<p>版画研究領域</p>

本研究領域における研究は基本的に大学における4版種の研究に立脚し、銅版画とリトグラフを軸としてシルクスクリーン・木版画さらに版表現に類する表現も含め各自の主体性に基づき継続的に専門性を追求します。版画は印刷媒体として派生し、その時代の社会に敏感に反応し表現や技術を発展させました。今日では絵画の一領域として、現代の多様化するメディアも視野に入れ、版表現としての造形思考を模索する事が重要となっています。そのために、時代の要求として生まれた表現がいかに普遍的表現に変わったか、史学的、科学的な要素も含めた検証を試みながら変遷をたどるとともに、具体的検証法として、特定の作家を題材にイメージの解明、創作コンセプト、素材と技術との相互の影響を分析研究し、今日のメディアをも考慮しながら現代の美術において独自な創作の方法論を確立します。版画表現における技術偏重が批判され、個人の創造性が期待されて久しいものの、一方、見方を変えたとその技術、素材などの研究、教育も不十分であり個人的研鑽と模索に委ねられていることも事実です。版画表現技術も創作研究の新たな視点として一貫した教育システムのうちに継承発展させる必要があります。実際のな技法と材料の研究を目的として、既存の材料、技法のみにこだわらず必要となる材料を各自で考案・開発する基礎力をつける事を目指します。

専任教員

阿部大介 あべだいすけ
2002年京都精華大学芸術学部造形学科版画卒業、2004年愛知県立芸術大学大学院美術研究科修了。様々な物質の表面を版材に使った技法を研究。2015年「皮膚感覚」阿部大介展(美濃加茂市民ミュージアム)など展覧会多数。

清水美三子 しみずみさこ
1988年女子美術大学芸術学部絵画科洋画専攻(版画)卒業。リトグラフの制作および描画材料を研究。国内外におけるグループ展に多数出品。団体展、個展を中心に作品を発表している。日本版画協会、春陽会会員。

<p>Textiles, Ceramics and Glass</p>
<p>工芸研究領域</p>

一 染
今までに習得した専門的な技法や制作に対する姿勢と方向性を多様に駆使して、より専門性の高い魅力ある作品を生み出し、新たな視点で創作を構築する場です。そのために、様々な表現方法を通して伝統と先端など対峙するテーマを考え、染の総合力を養うことが必要です。これらを踏まえて、学生は主体的造形と独自性のある表現を研究し、作品は「機能としての布」や「芸術としての布」、「伝統」と「現代」、「素材と表現」等の意味づけを明確化します。また、染色文化の一端を扱うといった意識を持って、社会に発信できる創作研究を目標にします。

一 織
大学で学んだ専門教育を基に、さらに高度な創作活動を目指して各自の研究テーマにそって新しい表現を研究していきます。絹や天然染料による染色など伝統的な染織技法による着物から、織物組織や特殊加工によるオリジナルファブリック、柔軟な発想で素材の魅力を引き出すテキスタイルアートの制作まで幅広い織の分野に対応します。素材の特色を生かし、発想から独自技法へと展開していく過程で常に考察することが、新しい表現を生む重要な要素です。伝統と現代を研究しながら多様化する現代に対応したデザイン・造形表現のため、素材や技術の新たな挑戦を目指します。

一 陶
陶についての知識・表現方法を一通り修得した人が、さらに進んで研究を行う場です。陶の特徴は「粘土や釉」を「焼いて作る」という点です。「粘土や釉」の部分は、素材作りということに対応しています。日本および世界の土石原料を用いて、素材である粘土や釉が調合され、多種の陶素材が作り出されています。「焼いて作る」という部分は、焼成方法と成形方法に対応します。焼成方法では、窯の様式・焼結温度・還元度合などの要素があり、それらの条件のありかたによって陶の物質感が大きく変化します。成形方法では、研究者が自らの身体によって素材を扱うということが要点であり、技術向上・技術応用・新技法考案などの観点が挙げられます。これら様々な事柄を関連させることで陶作品が作り出されます。多くの先人たちが優れた成果を出しています。伝統ある分野ですので、その歴史をふまえた上で、自分の問題意識を明確にし、研究に励んでください。

^[1] ※掲載されている教員名は2021年度の担当です。2022年度は変更になる場合があります。(五十音順掲載)

^[2] ※掲載されている教員名は2021年度の担当です。2022年度は変更になる場合があります。(五十音順掲載)

ヒーリング研究領域

ヒーリング研究領域

我々が日常生活において、心地よい空間、潤いのある空間で生活を営むことは、精神衛生上不可欠な問題です。精神の安定とストレスの溜まりにくい、リラックスした環境作りについて考えると、そこにはデザインやアートの存在が重要な役割りを果たす要素として関わっています。

現代社会におけるヒーリング(癒し)について、アートとデザインの領域から個々のテーマを設定し、研究していくことで、社会との関わりや必要性を探ります。ヒーリング表現を、創作と理論を通して考えていくことにより、自己の可能性を広げるとともに社会性のある新たな発見を目指します。

また、社会の様々な現場で活用されているワークショップ型創作活動によって、個人や集団のコミュニケーションを高め、社会に横たわる様々な問題の改善方法を探ることも視野に入れています。加えて、医療空間や福祉施設、様々な公共空間、日常生活空間に至るまで、人の暮らしとヒーリングの関係を考察し、ヒーリングを目的とした表現、手段、媒体について、ヴィジュアルデザイン、環境デザイン、映像表現、絵画表現などの作品制作や理論研究によって探求していきます。

さらに、身体と向きあうボディワークを通してアートや環境から得られた『気づき』を、各人の創作や研究に結びつけていきます。同時に、研究テーマに対して、調査と検証に基づくデータ分析などから理論的な研究を推し進めていきます。これらにより各自の研究を社会にどう還元し、活用していくのかといった方法についても探っていきます。

専任教員

野呂田理恵子 のろたリエ

横浜出身。女子美術大学卒業、東京藝術大学大学院修了。環境デザイナーを経て渡英。2007年パーミンガム・シティ大学大学院 MA Art, Health and Well-being 修了。専門はアートアクティビティによる社会包摂。病児、重症心身/聴覚障害者、子育て中の母などとの<芸術と医療・福祉>のあり方を提案している。アートミーツケア学理事。特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン理事。

保高一仁 ほたかかずひと

1981年長野県生まれ。2005年多摩美術大学大学院修了。アートと芸術療法（アートセラピー）の関係を研究テーマにし、幼児から高齢者まで、様々な世代の方を対象にしたアートアプローチを実践している。

山野雅之 やまのまさゆき

1980年東京藝術大学美術学部デザイン科卒業、1986年同大学大学院美術研究科博士後期課程満期退学、1988年学術博士学位取得。ヒーリング・アートが研究テーマ。小児病棟を中心に医療空間のアメニティを高めるアートプロデュースを多数手がけている。

ファッションテキスタイル研究領域

ファッションテキスタイル研究領域

人は何のために衣服を身につけてきたのか？

そして、衣服は何のためにあるのか？

衣服の歴史

衣服は、あらゆる意味においての身体保護、装飾性、身分の証、そして自己のアイデンティティを示すなど、様々な役割を果たしています。このことを踏まえながら、日常における自然な行為を再認識し、身体や社会が提起する問いに対する答えとしての衣服や、その多様性、さらには身体や衣服に対する概念について、様々な視点から考察を深め、研究し、社会への還元を目指す必要があります。本領域では、自己の存在と向き合いながら、人と空間、人と環境について考察し、衣服と身体の関係が、社会の中でいかにあるべきかを思索し、作品制作と論理的な研究へと繋がります。具体的な活動として、日本の伝統繊維の地域プロジェクトは、その土地の気候風土や文化の調査研究を基に、ワークショップや新しい発想から作品制作、発表へとつなげます。また、テキスタイルや衣服は、人の心を支え、社会参画を促すコミュニケーション・メディアとしての役割を持つことから医療や福祉との活動、ファッションやテキスタイルに関連するプロダクトデザインの企画、制作など、企業との共同研究の取り組みも推し進めます。

各人は、アートやデザインその他領域の人や物との交流や衣服・テキスタイル・繊維等の多様な研究をもとに、それぞれの研究テーマについて考察し制作に繋がります。

ファッションと身体

ファッションと環境

ファッションと文化

ファッションと社会

ファッションと生活

眞田岳彦 さなだたけひこ
衣服造形家。1962年東京都生まれ。ISSEY MIYAKEにて衣服を学び、92年渡英し、彫刻家Richard DEACONにアートを学ぶ。95年福国SANADA studio設立。北極圏グリーンランド滞在、国立民族学博物館外来研究員等を経て日本の衣服/繊維研究・造形・教育を行う。ロンドンクラフトミュージアム、メゾンエルメス、森美術館他作品展示多数。せたがや文化財団生活工房、被災後の心を包む支援プロジェクト熊本他、地域再考プロジェクト多数。無償人材教育組織「眞田塾」、衣服造形「七月七日会」主宰。著作「考える衣服」、「ひらく衣服」(スタイルノート)他。

山村美紀 やまむらみき

女子美術短期大学専攻科服飾デザイン修了、昭和女子大学大学院生活機構研究科環境デザイン専攻修了、修士(学術)、クリエイティブパタンナーとして(株)ヨウジヤマモト、(株)コムデギャルソンを経て、衣服設計、構成を中心に研究を行う。他領域との共同研究として「Op Artの手法と透過型液晶フィルムを応用したテキスタイル表現の提案および衣服への拡張」[Fashion and Textile for Augmented Human for Space]など。

山本真由子 やまもとまゆこ

アートプロデュース研究領域

アートプロデュース研究領域

アートプロデュース研究領域

アートプロデュース研究領域

経済的な繁栄だけが人間の幸福を保証する時代は終わり、その経済的な価値を根拠としてきた芸術文化の再考と、その社会化の画一的な方法論の変革が求められる中、新たな社会をデザインする高度な知識と、人間の幸福を導く発想力と行動力をもって社会に貢献する、「表現者」としてのキュレーター（学芸員）、アートプロデューサー、コミュニケーターが求められています。

「アートプロデュース研究領域」はさまざまな芸術表現の融合によって、新たなアートプロデュースの可能性を探求し、いかに社会を蘇生創造するかという、「社会のデザイン化」に関する研究と実践を展開します。

私たちが取り組み、深めていく研究には、アートという存在が、人間中心の「社会」そのものであると捉え、視覚芸術、音楽、演劇といった芸術表現だけではなく、広く政治、経済、教育、福祉、医療などの視点が必要です。「美術館」に象徴される既存のアートの場を解放し、多様な生き方を受け止める社会づくりへ寄与する「アートの場」のプロデュースの術を探求していきます。

アートプロデュース研究領域

ヴィジュアルデザイン研究領域

ヴィジュアルデザイン研究領域

ヴィジュアルデザイン研究領域

^[1] ※掲載されている教員名は2021年度の担当です。2022年度は変更になる場合があります。(五十音順掲載)

^[2] ※掲載されている教員名は2021年度の担当です。2022年度は変更になる場合があります。(五十音順掲載)

Product Design

プロダクトデザイン研究領域

プロダクトデザイン研究領域は、社会・人・モノにおける課題を解決し、人が心豊かに生活するためのより良い未来を指し示すデザインです。

現代のプロダクト開発は、これまで人の欲求によって多種多様に行われてきましたが、現在は「社会課題に対応する発想を起点にして、人の生活を快適で心を豊にするライフスタイルの中に存在する」という利他の価値観へ大きく方向転換しています。

これを満たすには、新しい素材や技術だけでなく古くから人の生活に根差し環境に負荷をかけない素材や技術を見直し現代へ応用する研究、または新しい素材・技術と古くからある素材・技術と複合し異分野の業界が連携する取り組みを想定するなど、モノが作られる要素を分解・分析して未来を描くことを研究の領域としています。モノの機能や造形表現の研究は、先に挙げた上流の思考の上に成り立つものであり、広い視野で社会課題の解決を目指すことを含みます。未来へ向けたオリジナリティある視点を自由に探求する場として支援します。

専任教員

春日亀美智雄 かすがめみちお
1983年筑波大学芸術専門学群生産デザインコース卒業。小西六写真工業株式会社デザイングループ、シライ・インダストリアルデザインを経て、1987年、春日亀意匠設立。食・道具を中心にプロダクト製品の開発に携わる。空間的プロダクトでは、ユニット住宅の外壁レリーフ、展示什器など。また3Dプリント等技術を活用したプロトタイピング・立体オブジェ、などのデザインにおいても実績を持つ。

廣田尚子 ひろたなおこ
1990年東京藝術大学美術学部デザイン科卒業。GKインダストリアルデザインを経て1997年ヒロタデザインスタジオ設立。2006年女子美術大学特任助教教授2012年から現職。プロダクトデザイン、社会におけるデザインの役割、仕組みのデザインを研究。

松本博子 まつもとひろこ
1983年女子美術大学芸術学部産業デザイン科卒業後、東芝デザインセンターにてデザイナー、デザインディレクターとして家電、AV機器、ヘルスケアなど多くの商品・仕組みのデザインを手がけ、グッドデザイン賞金賞、IF・red dot design award金賞など、国内外の受賞歴多数。地域や産学連携プロジェクトに多数取り組み、「こと・もの」のデザインで地域や企業の問題解決を実践。

Environmental Design

環境デザイン研究領域

環境デザイン研究領域は、人と空間・環境の相互関係をデザインし、21世紀の新しい生活環境を研究する場です。

20世紀の近代デザインは、人々が共に健康で豊かな生活ができる社会の実現を目指しましたが、科学技術や社会構造の急激な変化が引き起こした資源浪費や環境破壊などのマイナス面に十分な対応ができませんでした。その解決が求められているのが現代であるといっても過言ではありません。

本研究領域では、インテリアデザインと建築・都市デザインを通して、人にやさしい生活空間と持続可能な都市環境への提案を行います。そのために手と目から思考する自由で高度な研究・創造活動を支援します。

専任教員

伊勢克也 いせかつや
1986年東京藝術大学大学院美術研究科修了、自然／人工物／メディア空間等さまざまな環境で発生し存在するモノやイメージが形作る形態をテーマに作品を制作し、さまざまなワークショップを行なっている。制作のためのプロジェクトや制作された作品は全て「Macaroni」という名称でまとめられている。個展やグループ展等で作品を発表。国内外のプロジェクトにも参加している。著書/作品集に「Macaroni」1990年、『FOIL Vol.3 NATURE/自然 伊勢克也』2003、『家について』2005、『弘道軒清朝体活字の世界－女子美術大学所蔵弘道軒清朝体活字関連資料』（共著）2016,がある。2017年より東京都交流プログラム「TURN」にアーティストとして参加。2012年からスタートしたポーランド、KATOWICEでの日本庭園プロジェクト「Ogród japoński w Katowice」を継続中。

後藤浩介 ごとうこうすけ
1987年九州芸術工科大学芸術工学部（現九州大学芸術工学部）工業設計学科卒業。GK設計にて環境デザイン/パブリックデザインに従事。2003年東京大学新領域創成科学研究科環境学専攻社会文化環境コース修了。同年、女子美術大学短期大学部特任准教授,2009年より現職。ストリートファニチュア・パブリックプロダクト等を通して、場所・モノ・生活の関係を研究

横山勝樹 よこやまかつき
1990年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程修了。学校の計画・設計を手がけながら、人間環境学、バリアフリー環境、教育施設計画、環境防犯設計などを中心に研究。著書に「建築・都市空間のための調査・分析方法」ほか多数。

吉田貴子 よしだたかこ
1988年東京都立芸術大学美術学部デザイン科卒業。近藤康夫デザイン事務所を経て1995年吉田貴子デザインスタジオ設立。主に、店舗空間や商業施設の環境デザインに携わり、多数の店舗デザインを手がけながら、商業の進化や業種業態の多様化を踏まえ、よりハイブリットな店舗空間やサービス空間のデザインのあり方を研究。

芸術文化専攻

Science of Color

色彩学研究領域

人間は「視覚的動物」であるといわれるくらい、外界の情報を「見る」ことによって探り入れています。このため美術、娯楽、学問、生活など多くの場面において「見る」という行為は人間にとって非常に重要な役割を果たします。「見る」ことによって形や奥行き、動きなどの情報を得ることができますが、人間の視覚メカニズムは色を見るためにできており、色の知覚から形や奥行きを知るようになっていきます。つまり色彩は人間の生活・文化活動にとって第一義的に重要な要素であり、芸術、癒し、娯楽、生活などを考える場合に非常に重要な役割を果たします。

そこで色彩について学問しようと考えるとき、色彩のもつ2つの側面に注目する必要があります。まずひとつは、色は人間の内部に生じる心理的現象であるという点です。色は目に入った光から我々の脳が創り出す感覚であり、個人的な心理経験です。このため知覚、記憶、言語、感情、文化などさまざまな人間の心理活動に影響を持ちます。そこで色彩の現象的側面を研究しようとするには、心の働きを知るための心理学的手法を学ぶ必要があります。人間の心の中に生じる各種の色彩現象を客観的に把握するための心理学的原理、調査・実験手法、データ処理、そして研究史などを中心に学ぶ必要があるのです。

もうひとつは色を生じさせるための原理です。色という感覚が我々の心理過程に生じるためには、その原因となる物理的存在が必要となります。作品をつくるとはまさにこの要因を作ることであり、どのようにすればどのような色が生じるのかを知るということが重要です。色の原因は主に我々の目に入る光であり、照明デザインならずとも創作するものにとっては見る者の目にどのような光が入りどのように見えるのかを知ることが重要です。

本研究領域ではこれらの色彩の心理学的側面と物理・光学的側面の両面から研究を行い、大学で学んできた色彩学の知識や技術をさらに発展・展開させていきます。そしてそのうえで各自のテーマをより明確に解明していくことができるよう、より詳細な分野にわたり指導を行います。

専任教員

坂田勝亮 さかたかつあき
1982年横浜国立大学教育学部心理学科卒業、1985年早稲田大学大学院文学研究科博士前期課程修了。研究領域は色彩学を主として、視覚心理学、造形心理学「見る」という現象の解明から表現を考える。著書に「心理測定法への招待」「色彩科学ハンドブック」「錯視の科学ハンドブック」「色彩学入門」など。

Art History

美術史研究領域

本研究領域では、西洋美術史、日本・東洋美術史の研究分野があります。美術史研究は、美術作品が制作された当時の歴史的文脈を明らかにするとともに、人間の営みとしての美術の役割、その今日的な意義を検証するものです。

長年にわたって構築されてきた人文科学・社会科学の方法論を踏まえることはもとより、近年の隣接領域のさまざまな研究方法や成果を柔軟に取り入れながら、美術史を構成する基本的な問題としての時代様式や作品の分析、作家論、受容史などにアプローチします。本研究領域の研究指導科目である「美術史研究」や「美術文化特殊研究」、共通理論科目の中の美術史系科目のほか、共通実技科目である「芸術創作応用」を選択することにより、素材の研究や表現技法の研究など美術大学ならではの科目を履修することができます。それによって芸術家より具体的な創造の源に近づき、多角的な美術史研究が可能になるでしょう。

また、研究関連科目として文化財の保存修復の諸問題を扱う「保存修復論」、美術や文化財の科学的調査・分析法を扱う「鑑定分析論」など、美術史をいわば理論と応用の双方から学ぶことができます。このように本研究領域は、現代社会の多様な要請に応えるべく幅広い教育環境を提供し、将来の様々な活動への展開が可能な美術史研究の新たな方向を目指しています。

専任教員

稲木吉一 いなぎよしかず
日本・東洋美術史専攻,仏教美術を軸とした日本の古代・中世の美術を主なフィールドとして、現代にも通じる美術の役割、普遍的意義といった問題も視野に入れつつ、広く宗教と芸術の関係に関心を寄せる。著書・論文に「新薬師寺と白毫寺・円成寺」「和様」美術と平安時代の宗教観】「元興寺中門夜叉像へのまなざし」など。

榎山満照 ならやまみつてる
専門は中国を中心とする東アジア古代美術史。図像学のほか、古代から近代まで続いた中国美術の他地域への伝播とその影響に関心をもち、異文化接縁の観点から、芸術と政治の接点について分析している。著書・論文に「聴の美術―鏡と石造遺物にみる後漢期の四川文化」、「漢代の立体人物像にみる具象と抽象―中国における仏像制作の前史として」など。

三谷理華 みたりにか
福岡市美術館、静岡県立美術館に学芸員として勤務。専門はフランスを中心としたヨーロッパの近代美術史、日仏文化交流史。フィールド・ワークから得られるデータを基にした美術史研究のあり方や環境や領域を超えた文化交流の諸相の解明を模索している。主な論文に「ラファエル・コランとフォントネー＝オーロズのアトリエをめぐる一考察」、「ラファエル・コランの極東美術コレクション―新出旧藏品について」、主な担当展覧会に「ラファエル・コラン展」、「レオナルド・ジタ展」など。

^[1] ※掲載されている教員名は2021年度の担当です。2022年度は変更になる場合があります。(五十音順掲載)

^[2] ※掲載されている教員名は2021年度の担当です。2022年度は変更になる場合があります。(五十音順掲載)

開設授業科目

博士前期課程

[美術専攻]	[デザイン専攻]	[芸術文化専攻]	
〈研究指導科目〉 洋画創作研究Ⅰ 洋画創作研究Ⅱ 日本画創作研究Ⅰ 日本画創作研究Ⅱ 版画創作研究Ⅰ 版画創作研究Ⅱ 工芸創作研究Ⅰ 工芸創作研究Ⅱ 立体芸術創作研究Ⅰ 立体芸術創作研究Ⅱ 〈研究関連科目〉 洋画表現技法演習 洋画材料・技法演習 日本画表現技法演習 日本画材料・技法演習 絵画材料・技法演習 版画表現技法演習 版画材料・技法演習 染織素材・技法演習 染織品保存修復演習Ⅰ 染織品保存修復演習Ⅱ 陶素材・技法演習 ガラス表現素材演習 立体芸術表現技法演習 立体芸術材料・技法演習	〈研究指導科目〉 メディア研究Ⅰ メディア研究Ⅱ ヒーリング研究Ⅰ ヒーリング研究Ⅱ ファッションテキスタイル研究Ⅰ ファッションテキスタイル研究Ⅱ アートプロデュース研究Ⅰ アートプロデュース研究Ⅱ キュレーション研究Ⅰ キュレーション研究Ⅱ ヴィジュアルデザイン研究Ⅰ ヴィジュアルデザイン研究Ⅱ プロダクトデザイン研究Ⅰ プロダクトデザイン研究Ⅱ 環境デザイン研究Ⅰ 環境デザイン研究Ⅱ 〈研究関連科目〉 アウェアネス演習 ヒーリングデザイン演習 インタラクティブ空間演習 情報メディア演習 メディアコミュニケーション特論Ⅰ メディアコミュニケーション特論Ⅱ 繊維衣服表現演習Ⅰ 繊維衣服表現演習Ⅱ アートプロデュース演習Ⅰ アートプロデュース演習Ⅱ 画像研究演習 コミュニケーションデザイン演習 デザイン素材演習 形態研究演習 空間構造演習	〈研究指導科目〉 色彩学研究Ⅰ 色彩学研究Ⅱ 色彩学特殊研究 A 色彩学特殊研究 B 美術史研究Ⅰ 美術史研究Ⅱ 芸術表象研究Ⅰ 芸術表象研究Ⅱ 美術文化特殊研究 A 美術文化特殊研究 B 美術教育研究Ⅰ 美術教育研究Ⅱ 美術教育特殊研究 A 美術教育特殊研究 B 〈研究関連科目〉 色彩管理演習 色彩実験・調査演習 視覚工学演習 視覚デザイン演習 保存修復論 A 保存修復論 B 鑑定分析論 文芸創作演習 芸術表象特講Ⅰ 芸術表象特講Ⅱ 社会芸術プログラム 美術教育基礎演習 デザイン教育基礎演習 美術教育論特講 A 美術教育論特講 B 映像メディア教育特論	〈共通実技科目〉 芸術創作応用Ⅰ※ 芸術創作応用Ⅱ※ 海外芸術プログラム 〈共通理論科目〉 造形芸術原論 アート&ビジネス論特講 デザイン原論特講Ⅰ デザイン原論特講Ⅱ デザイン史特講 色彩文化論特講 色彩工学特講Ⅰ 色彩工学特講Ⅱ 日本美術史特講 A 日本美術史特講 B アジア美術史特講 西洋美術史特講 A 西洋美術史特講 B 近現代日本美術史特講 現代芸術特講 A 現代芸術特講 B 伝統と創造 言語とアート A 言語とアート B 図とアート 現代文化論

※自専攻以外の研究関連科目を履修し、修了のために必要な単位を修得することができます。

博士後期課程

造形研究計画演習	造形理論特別研究Ⅱ	美術特殊研究	芸術文化特殊研究	デザイン研究指導
造形理論特別研究Ⅰ	造形理論特別研究Ⅲ	デザイン特殊研究	美術研究指導	芸術文化研究指導

・科目については変更となる可能性があります。

学費(初年度納入金 前年度参考)

博士前期課程

(単位:円)

科目	専攻	美術専攻	デザイン専攻	芸術文化専攻	
		洋画、日本画 版画、工芸、立体芸術	メディア、ヒーリング、 ファッションテキスタイル、 アートプロデュース、 ヴィジュアルデザイン、 プロダクトデザイン、環境デザイン	色彩学	美術史、芸術表象、 美術教育
①入学時納入金		959,430 (849,430)		945,430 (835,430)	
内訳	入学金	220,000 (110,000)			
	施設設備料	180,000			
	維持費	25,000			
	授業料	502,000			
	実習料	29,000		15,000	
	学生教育研究災害傷害保険	2,430			
	ニケの会費	1,000			
②後期納入金		736,000		722,000	
内訳	施設設備料	180,000			
	維持費	25,000			
	授業料	502,000			
	実習料	29,000		15,000	
①+②年額納入金		1,695,430 (1,585,430)		1,667,430 (1,557,430)	

()内は、本学芸術学部卒業(見込)生及び本学併設短期大学部卒業生の金額です。

- ※1 本学芸術学部卒業(見込)生及び、本学併設短期大学部卒業生は入学金は2分の1とします。
- ※2 学生教育研究災害傷害保険には、インターンシップ・教職資格活動等賠償責任保険を含みます。
- ※3 後期納入期日は10月5日です。

博士後期課程

(単位:円)

科目	専攻	美術専攻
①入学時納入金		584,620 (352,120)
内訳	入学金	130,000 ()
	施設設備料	90,000 ()
	維持費	12,500 ()
	授業料	347,500
	学生教育研究災害傷害保険	3,620
	ニケの会費	1,000
②後期納入金		450,000 (347,500)
内訳	施設設備料	90,000 ()
	維持費	12,500 ()
	授業料	347,500
①+②年額納入金		1,034,620 (699,620)

()内は、本学大学院博士前期課程修了(見込)生の金額です。

- ※1 本学大学院博士前期課程修了者は入学金および施設設備料・維持費を徴収しません。
- ※2 学生教育研究災害傷害保険には、インターンシップ・教職視覚活動等賠償責任保険を含みます。
- ※3 後期納入期日は10月5日です。

各種制度

学内奨学金

名称	対象	金額(年額)	貸与/給付	期間	採用人数
女子美大学院研究奨学金	経済困難・学業・性行良好 博士後期課程・博士前期課程全学年(特待生・留学生除く)	20万円	給付	1年	年度により異なる
女子美外国人留学生奨学金	留学生で学業優秀、経済的理由により授業料納入困難	40万円	給付	1年	3名

学外奨学金

学外の団体等によって運営されている奨学金制度です。対象、応募方法、募集時期は設置団体によって異なりますが、それぞれの条件にあてはまる場合にのみ応募できます。こうした団体の代表的なものとして「独立行政法人日本学生支援機構」があります。詳細についてはホームページでご確認ください。
日本学生支援機構 <http://www.jasso.go.jp>

私費外国人留学生 授業料減免

本学学生のうち成績優秀な私費留学生の経済的負担を軽減するために、授業料の減免を行う制度を設けています。資格：本学大学院在学生のうち、経済的理由により授業料の納入が困難であり、かつ学業優秀と認められる者 減免額：授業料の2割相当以内 減免期間：当該年度のみ

奨励賞制度

ノーベル賞受賞記念大村智賞●本学名誉理事長大村智博士のノーベル賞受賞を記念した賞。大学院博士後期課程に在籍し、博士の学位を取得した学生に授与されます。[副賞]記念品
加藤成之記念賞●故 加藤成之理事長・学長の業績を記念した賞。大学院の修了時に総代となった学生に授与されます。[副賞]記念品
福沢一郎賞●本学名誉教授の故 福沢一郎画伯の業績を記念した賞。大学院美術研究科博士前期課程の洋画および版画研究領域を対象とし、在学中の作品が優秀な院生に授与されます。[副賞]制作・研究奨励金5万円
大久保婦久子賞●本学卒業生で文化勲章受章者の故 大久保婦久子氏の業績を記念した賞。大学院美術研究科博士前期課程に在籍する在学中および修了時の作品が優秀な学生に授与されます。[副賞]制作・研究奨励金3万円
女子美術大学美術館奨励賞●修了制作が優秀な学生に授与され、その作品の画像データは美術館に保存されます。[副賞]記念品
女子美術大学美術館賞●女子美術大学美術館奨励賞受賞者の作品から選定され美術館に収蔵されます。[副賞]10万円

100周年記念 大村文子基金

女子美術大学創立100周年を記念し、ノーベル賞を受賞した大村智名誉理事長夫妻からの寄付をもとに、文子夫人の名前を冠して創設した基金です。
女子美栄誉賞●美術・芸術文化の分野において本学の発展に永年寄与した個人および団体に授与されます。[副賞]記念品
女子美バリエーション賞●大学院(含在学生)・大学・短期大学部卒業生を対象として国際的なアーティスト・デザイナー・研究者の育成を目的とし、毎年受賞者を1年間バリエーションにある「国際芸術都市」に研究員として派遣します。[副賞]制作・研究奨励金
女子美ミラノ賞●大学院(含在学生)・大学・短期大学部卒業生を対象として、国際的な芸術文化を吸収し、広い視野を持って世界的な総合芸術の分野で活躍できる人材育成をめざした賞で、女子美術大学とミラノのブレラ国立美術学院との学術交流協定に基づき、6ヶ月間ブレラ国立美術学院へ研究員、留学生として派遣します。[副賞]制作・研究奨励金
女子美ベルリン賞●大学院(含在学生)・大学・短期大学部卒業生を対象として、未来への可能性を期待できるグローバルな人材の育成を図ることを目的とし、毎年受賞者を3ヶ月間ベルリンに研究員として派遣します。[副賞]制作・研究奨励金
女子美制作・研究奨励賞●大学院(含在学生)・大学・短期大学部卒業生の優れた業績を称え、今後の制作・研究活動の奨励を目的とした賞です。[副賞]制作・研究奨励金
女子美美術奨励賞●大学院・大学・短期大学部在学生のうち留学生および付属高等学校・中学校の生徒の美術活動を奨励します。[副賞]制作・研究奨励金
蒔崎大村美術館賞●大学院美術専攻立体芸術研究領域に在籍する学生または修了生を対象として、優良な作品を蒔崎大村美術館に展示します。[副賞]記念品
大村特別賞●本学の建学の理念の実現に多大な貢献をした卒業生個人または団体、在学生・生徒個人または団体に授与されます。[副賞]記念品



発行：学校法人女子美術大学 企画・編集：総務企画部広報グループ 表紙：林規章 デザイン：新保慶夫+新保美沙子(smbetsmb)
発行日：2020年7月1日発行 お問い合わせ：女子美入試センター TEL 042-778-6123 〒252-8538 神奈川県相模原市南区旗塚1900
URL <https://www.joshibi.ac.jp>